

## 第2回シンポジウム『自然治癒力と自然免疫』開催される

日時 2013年3月27日(水) 13:00~17:10  
場所 笹川記念会館(東京都港区三田3-12-12)

高齢化がますます進行する中で、「病気になってからの治療」という受身の姿勢ではなく「健康長寿の追求」と「治療から予防」への転換が求められています。

こうしたパラダイムシフトの動きなどを踏まえ、「自然免疫制御技術研究組合」では、2011年11月の第1回シンポジウムに続いて、本年3月27日、『自然治癒力と自然免疫』というテーマで第2回シンポジウムを開催いたしました。

当日は、東京理科大学薬学部教授・寺田弘氏を座長として、東京大学医科学研究所教授・三宅健介氏による自然免疫メカニズムの最先端科学、香川大学医学部客員准教授・稲川裕之氏による自然免疫活性化の有用性、社会福祉法人老人ホーム同和園附属診療所所長・中村仁一氏による自然死を見つめてきた同氏の死生観についてご講演を頂きました。



三宅氏からは、「Toll様受容体の活性制御機構とその破綻」と題して、免疫機構における感染防御反応を誘導する病原体センサーの一つである「Toll様受容体」が病原体成分への応答と自己成分への不応答のバランスをいかに保っているか、また、その制御機構の破綻がどのような病態をもたらすのか、などについてご講演を頂きました。



続いて、稲川氏から、「糖脂質を用いたマクロファージ制御と自然治癒力」と題して、発見経緯から不遇な扱いを受けてきたグラム陰性菌のLPSが、受動的ではあるが有益な効果があるとして大いに利用されていること、さらには、経粘膜的に用いることで疾患の予防や治療が可能となることなどについてご講演を頂きました。

最後に、中村氏からは、ご自身が関与する老人ホームにおける安らかな自然死を看取ってきた経験から、「自然死を見つめて～家族と医療者と介護職が“穏やかな死”の邪魔をする～」と題して、病院における延命のための過剰医療に疑問を呈するとともに、自らの体内から発せられる諸々のサインに敏感となる必要があることなどについてご講演を頂きました。



## 「ifiaJapan2013」で健康支援食品制度の普及・広報活動

LSINがSTEP(一般財団法人四国産業・技術振興センター)とともに事務局をつとめる「健康支援食品に関する地域ブランド認証システム検討委員会」では、東京ビッグサイトで開催された「ifiaJapan2013」(第18回国際食品素材/添加物展・会議、5月15日~17日、主催:食品化学新聞社)において、平成24年度にとりまとめた「健康支援食品制度」に関する普及・広報活動を行いました。

開催期間中は、会場内の産学官連携コーナーにおいて展示パネル等を使って来場者に本制度に関する概要説明を行うとともに、16日の「食品機能性表示シンポジウム」(主催:一般社団法人北海道バイオ工業会)では、STEPの森連携コーディネーターが北海道・大阪府・新潟県の担当者とともにパネリストとして参画し、本制度の創設に向けた四国の取り組み状況などを紹介しました。

